

ロゴスからミュートスへ

橋本 崇

古代ギリシアにおいて哲学は、一般に地域や時代によって異なる神話による世界生成の説明から、水や火といったより普遍的な原理による説明へと移行する過程において誕生したとされ、ミュートス（神話）からロゴス（論理）への道を歩んだとされる。

しかし、19世紀前半にヘーゲルと対決した後期シェリングの『神話の哲学』は、ミュートスからロゴスへの一方通行を進歩として崇める啓蒙主義的風潮に対して、全く逆のロゴスからミュートスへという流れを主張したといえる。

「神話の哲学」を語るならば、神話と哲学がいかなる関係にあるのかを問うことはさげられないであろう。すでに哲学的意識を持ったものが神話について語るとするならば、哲学は神話より根源的に人間の意識を規定することになり、哲学は神話に先立つ。逆に、哲学的意識そのものが神話において生み出されると考えるならば、神話は哲学より根源的であり、先行することになる。

「我々が今神話を考察していく立場においては、我々が神話を持つのではなく、神話が我々を握えたのである。従ってここからの講義の内容は、我々によって明らかにされる神話ではなく、神話自体が明らかにする神話である。」(12, 139)*¹と語るシェリングが後者の立場に立つことは明らかである。神話は地域や時代により様々な形で世界や自然の生成を説明してきた。「神話を成立させる神統記の過程は、意識の個別の法則に従うのではなく、普遍的な世界法則に従うことができる。その過程は宇宙的意義を持つ。」(12, 4)とシェリングが述べるように、神話の中で語られる神々による宇宙や自然生成の過程は、自然のうちの一被造物にすぎない人間が自己意識を展開して構築しようとする学より遙かにスケールの大きなものであり、シェリングが人間の「究極の絶望に満ちた問い」とする「なぜそもそも何かが存在して、何もないのではないのか？」(13, 7)が立てられる存在の根拠にまで根付いている。「神話の意義は、単に語られた出来事が現実的であることにある。」(11, 10)あるいは「我々は神話の哲学について語るならば、神話にも客観的真理を帰さねばならない。」(12, 3)というように、後期シェリングの神話哲学においては、神話を人間の意識のうちに説明しようとするのは本末転倒であり、意識そのものの生成をも神話のうちに明らかにしていくような、より根源的な視野が求められているのである。

それでは、神話のうちに人間の意識の生成はどのように明らかにされているのであろうか？意識は、自己を意識し学を展開させていく以前に、既に存在していなくてはならない。この意識をシェリングは、「あらゆる現実的意識以前のその実体における意識」とし、その意識において「人間は自己の意識ではなく、……それでも何かについての意識でなくてはならないならば、神についての意識でのみあり得る。現実態、すなわち知や意欲と結びついてはいない、従って純粹に実体的な神についての意識である。根源的人間は、現実態においてではなく、その本性において神を定立するもの（*natura sua das Gott Setzende*）である」(11, 185)とする。すなわち、根源的な

人間の意識はまだ何も現実意識するには至っておらず、ただそのように存在せしめられているにすぎない。しかしそれにもかかわらず、意識が何かについての意識であらねばならないとするならば、それは意識を被造物としてそのように存在せしめている創造者である「神」についての意識とする他はない。しかも、その「神」についても未だ現実的ではない意識は、その姿を思い描くことも、何を求めて被造物を創造し、何を明らかにしようとしているのかを知ることすらできない。そのような何もまだ現実には意識していない根源的人間の意識を「実体における意識」とするのである。

そして、この「実体における意識」が「現実的意識」へと移行する「人間の意識に関する最初のこと」、「根源的出来事 (Urereignis)」が「最古の原始偶然 (der älteste Urzufall)」であり、「それまで安らいでいた意志が、自身に示された存在を現実意識して、意志である純粋な存在可能から、偶然的で身に招かれた存在へと現実高まる」「根源的事実そのもの (歴史の始まり)」であり、「思惟の及ばない宿命 (unvordenkliche Verhängniß)」(12, 153)とされる。さらに、この「原始偶然」について「意識をこれから逆らい得ぬ運命に従属させることになるかの経緯そのものは、今や現実的となりそれ自身疎外された意識にとっては、必然的にその底知れぬ深淵のうちに沈んでいる」ので、「その経緯そのものにまでは想起も及ばない」が、「意識を神話の必然性に従属させた現実の経緯の痕跡は、ギリシア神話のみ、特にペルセフォネーの話に属する神話見いだされる」とシェリングは言う。なぜなら、「行為の結果のみが意識に残る」のであり、「この経緯の暗い痕跡は、後の神話において初めて見いだされる。過程の始源に存在するものは、終局によって初めて明らかになる。神話は過程において成立し、その過程の終局はギリシア神話である」(12, 154)からである。

ここでシェリングは、ピュタゴラス派のモナス (Monas, 一) とドウアス (Dyas, 二) からすべてが生まれるという説を用いながら、この「原始偶然」の「現実の経緯」を神話において明らかにしているが、他に『哲学的経験論の叙述』においても、このピュタゴラスの説は、概念の形成を説明するものとして言及されている。すなわち、すべてのものは絶対に認識され得ない「限界なきもの (アペイロン)」に、「限界づけるもの (ト・ペライノン)」が「形相」や「概念」を与えることにより生じ存在しているのであり、この「限界なきもの」が「母」なる「ドウアス」、「限界づけるもの」が「父」なる「モナス」であると言うのである。(10, 243)

ペルセフォネー神話においてもこの説を用いて、ハーデスに連れ去られる以前の何不自由なく花に囲まれているペルセフォネーを「無垢 (Unschuld)」、「二つの性を全く知らない処女性 (Jungfräulichkeit)」、あるいは「性の未決定性 (Geschlechtsunentschiedenheit)」と解釈する。さらに、その処女性について「ペルセフォネーは意識において存在可能 (das Seynkönnende) であり、その限りに関して女性的なものであるが、男性的なものにまだ対立していない女性的なものである。」と説明している。(12, 157) すなわち、「それ自身に対して何もなすことができない可能性が女性性であり、可能性を初めて何かとして存在させるか存在できるようにする意志が男性性である」(12, 155) から、まだ何も現実には意識していない「実体における意識」あるいは「その根源状態における根源的意識」(12, 159)とされるペルセフォネーの処女性において、意識は未だ男性性である現実的な意志に出会っていない。従って、処女性における意識は「存在可能」に

すぎず、「内的にとどまる」ことも出来れば、「外へ出る」ことも出来る「二義性」を持っている。しかし、ペルセフォネーがハーデスに冥界へと連れ去られるように、現実的な意志である男性性との出会いは突然もたらされ、「偶然の不運」あるいは「最初の災い」(12, 160) とするほかないものであるから、「原始偶然」とされる。

この経緯をピュタゴラスの説を用いて解釈するならば、「ドウアス (女性的なものとして+にもーにもなりうるもの)」である処女性が、「モナス (男性的なものとして一なるもの)」に出会うことによりすべてが生じる。(12, 155) そして、「ピュタゴラス派は自らのドウアス説によってペルセフォネーを解明しようとしたのではなく、逆にペルセフォネーを示唆し関連づけることによって自らのドウアス説を解明しようとしたのである」から、「ペルセフォネーの説がまさに示したように、神話はその究極の根とともに、人間の根源的意識のうちに根付いている。」(12, 161) とする。ここでも繰り返して神話の哲学に対する根源性、先行性が強調されているのであり、神話の根源性を「実体における意識」という人間の意識の根源性において解明しているのがペルセフォネー神話に他ならない。

さらにシェリングは、「ペルセフォネーは現実の神話において、すなわちヘシオドスの神統記という詩において、ハーデスの手中に落ちるまで、ハーデスによってさらわれるまでは登場してこない。しかし、ペルセフォネーは神話の中に最初から存在するのであり、神話的意識において、存在すべきでないもの、不正なもの、不吉なものとして自身が説明されて初めて、そのようなものとして認識されるようになる」(12, 163) と付け加える。すなわち、「実体における意識」はあらゆる現実的意識に先行し、より根源的なものであるから、現実には神話が語り出される以前に既に存在している。そして、その存在のあり方は、行為の結果である神話に記された現実の出来事からのみ、その痕跡に辿り着くことが出来るとシェリングはするのである。

この「原始偶然」については、ヘシオドスの『神統記』の宇宙生成のくだりについて考察している部分でも言及されている。『神統記』によれば、まず原初に生じたのはカオスであり、次にガイア (大地) が生まれ、ガイアはウラノス (天) を生んだ。他方、カオスからはエレボス (暗黒界、冥界) とニュクス (夜) が生じ、ニュクスからモロス (定め) やタナトス (死)、モモス (非難) らが生まれたとされる。

シェリングはまずカオスが「欠乏や不足」(12, 596) 「(後の経験的充実に対して) 相対的な空虚、無抵抗性という表象を根底に持つ純粋に哲学的な概念」(12, 597) を表しているとし、「その中立的なもの、無性的なものであるカオスから最初に生み出されるものが、女性的原理、ガイアである」(12, 615) と解釈する。そして、このガイアは「神を生む原理」(12, 616) であり、何かを生み出すためには生み出すための素材、質料があらかじめ与えられねばならないように、意識が生まれる以前にも意識の対象となる何かが実在し、意識によってこの実在するものが質料化されねばならないから、この「実在の原理」(12, 616)、「意識における質料化された根源的原理」がガイアである。更に、このガイアが生み出し、やがてガイアとの間にオケアノス (大洋) やクロノスを生み出すことになる男性神がウラノスであり、この女性的なものと男性的なものの対立において「神話的なものの基盤」(12, 617) が据えられたとするのである。

他方、カオスから生まれたとされるのがエレボスとニュクスであるが、この三者の関係につい

てシェリングは、「絶対者そのものは、すでにそのうちに隠れてはいるが、未だ全く開かれていない対立と全く関係を持たないものとしてみれば、それはカオスであるが、同じ絶対者をこの対立に関する単なる否定、対立の単なる非存在と考えることも出来る。このより否定的な概念に対応するのがエレボスであり、確かにハーマンとともに覆うもの (Bedeckende) と説明することが出来る。エレボスは未だ対立を覆い、覆い隠した絶対者であり、更に意識において、否定的な何かであるのと同じように女性的なものとしてこの絶対者に対応するのが、対立を否定するのではなく見えなくするものである。これがニュクスである」と解釈している。すなわち、あらゆるものは絶対者の顕現であるが、その顕現には様々な見る角度があり、未だ内なる対立を顕さず、形もなく何も見えない状態においてはカオスであるが、カオスにおける対立を覆い隠し、何も生み出されない状態にとどめている否定の契機を強く見れば、カオスはエレボス (冥界) を生むと見ることも出来るし、カオスが対立を否定するのではなく、包み込んで見えなくしていると見れば、カオスはニュクス (夜) を生むとすることが出来る。

そして、「この意識の最初の暗がりで見分けのつかなさの中には、続いてその中から登場してくる子供たちが既に含まれており、この子供たちが、運命あるいは原始偶然であるモロスと、あらゆるイロニーの原理、苦痛 (一般的な苦痛ではなく、人類全体に科せられており、神話の過程において人類に抱かれているかの大きな苦痛)、反目などといったモロスである」とし、「この夜の子供たちの系譜学は純粋に哲学的である」(12, 621) とする。

ここで先にペルセフォネー神話において説明された「原始偶然」が再び登場するのであるが、「まさに実在的な神の手に落ちた意識であるペルセフォネーそのものが、後の神話的な哲学説においてモロス、宿命、運命と示される」(12, 622) のであり、「一性から初めて他性が現れ出るにより、あらゆるイロニーと非難の基盤が据えられる」のであるから、「モスは他性、対置されたもの、対立を探し求めるもの」(12, 623) とされる。ここでシェリングは、「実体における意識」が「現実的意識」へ移行する、ハーデスによるペルセフォネー誘拐の経緯を、カオスからニュクス、ニュクスからモロスとモスが生まれる経緯に置き換えているのであり、ペルセフォネーの処女性に相当するカオスは、対立を否定して現実的なものに出会わない状態にとどまろうとするエレボスと、対立を否定せずに内に隠しながら現実には何かを生み出すニュクスの二義性を持っている。そして、このニュクスが現実的なものに出会って生み出すのが「原始偶然」とされるモロスであり、他性や対立を探し求めるモロスなのである。

このように「原始偶然」を解釈するシェリングの神話哲学が、意識の起源を神話に求め、哲学をより深い根源へと導こうとしていることは明らかであろう。フォルクマン＝シュルツの言葉を借りれば、「絶対概念であるロゴスはその支配を完成しながらも、ミュートスに対しては否定的 (消極的) に関わるにとどまったのであり、ミュートスに背を向けることによりその支配を打ちたてた。従ってロゴスは、未だロゴスではない他者を把握し、含み入れることが出来て初めて、その絶対性を守り示すことが出来るのである。ロゴスを到達している絶対性から成長させるというこの課題を、シェリングは神話の哲学において引き受けたのであった。」*すなわち、すべてを意識において把握する絶対概念としてのロゴスは、これまで自身にとって他者であるミュートスを否定し、閉め出すことによりその支配を確立してきたのであるが、その支配を絶対的なものと

し、すべてを包括する絶対概念となるためには、他者であるミュートスをも把握し含み入れねばならない。しかし、このことは決してミュートスをロゴスに変えてしまうということではなく、「課題はむしろ神話を神話として、ロゴスに対する他者として把握することにより、その固有のままにしておき、その固有のあり方において初めて現出させることである。」^{*iii}すなわち、ミュートスをロゴスのうちに包含させると言っても、ロゴスがミュートスを閉め出していたこれまでのあり方を変えなければ、ミュートスをミュートスとしてそのまま把握することは出来ない。ロゴスは自身のこれまでのあり方を改めつつ拡張し、ミュートスがミュートスとして語られるその根源にまで達しなければならないのである。「現在の意識はロゴスによって規定されている。しかし、ロゴスはミュートスにより媒介されているのであるから、ミュートスを把握することなしに自身を十全に把握することは出来ない。ロゴスの支配が、神話の哲学による我々の意識の拡張そのものを要求する」^{*iv}のである。

フォルクマン＝シュルツの、ロゴスがミュートスに対して「否定的（消極的）に関わる」という言葉は、後期シェリングが自身の積極哲学によって乗り越えられねばならないとして批判した消極哲学の立場を端的に表している。後期シェリングは「実存について、現実存在するものについて、そしてこの意味での認識については全く語らず、諸対象が単なる思惟のうちでとる関係についてのみ語る学」（10, 125）を消極哲学とし、「ヘーゲルの叙述する哲学は、自身の制約を超えるよう駆り立てられた消極哲学であり、積極的なものを閉め出さず、ヘーゲルの見解によれば積極的なものは消極哲学のうちに屈服したとされる」とヘーゲルを批判する。すなわち、自己意識の展開により意識の内容については様々に論ずることが出来ても、意識の存在という積極的なもの（現実存在に関わるもの）については語れないという制約を持つ消極哲学は、自身の制約を忘れ積極的なものについて語り始めると、ミュートスをロゴスに変えてしまい、ミュートス固有の語りに耳を傾けないという越権行為を犯すことになる。もし消極哲学が積極的なものについて語ろうとするのならば、自身の制約を自覚して、自身のロゴスのあり方をミュートスにあわせて変えなくてはならないというのである。従って、「正しく理解された消極哲学が初めて積極哲学を導き、逆に積極哲学は正しく理解された消極哲学に対して初めて可能になる。消極哲学は自身の制約のうちへと連れ戻されて初めて積極哲学を認識可能にし、さらには単に可能にするばかりでなく必然的にする。」（13, 80）消極哲学は積極的なものについて語れないという制約を自覚することにより、ミュートスをミュートスとして受け入れることが出来るようになり、必然的に積極哲学へと移行するのである。

このようなミュートスとロゴスの関係を捉え直す見方は、経済主導のグローバリズムや、アメリカ主導の自由主義的歴史観が跋扈する現代世界においてもきわめて示唆に富んでいると思われる。歴史の進歩を宗教的迷信から理性による解放と捉えるいわゆる啓蒙主義的歴史観は、歴史を人間の自由の拡大として捉えるヘーゲルの歴史哲学と合致し、現代アメリカにおいて「歴史の終わり」を見いだそうとする自由主義的歴史観を支えている。

しかし、そのような直線的な歴史観はとすると、他の宗教や伝承に基づく世界観を否定し排除する一方的なものになりがちであることは、最近のアメリカのイラク侵攻を見ても明らかであろう。最も重要なことは、ロゴスがロゴスの世界の中だけで閉ざされた体系を構築するのではな

く、ミュートスとの間に開かれた真の対話を遂行し、自身の世界を豊かにしていくことであるが、そのためにはロゴス自身が自身の限界を自覚し、他者に対して耳を傾け、自身のあり方をも改める可能性を開いておくことが不可欠なのである。このような限界の自覚を、後期シェリングは実存に対する問いに求め、宗教的地平を深めていった。しかし、現代に生きる我々は自身の実存を説明できないという限界を認めることは出来たとしても、そこからどこへ向かうことが出来るのか。ニヒリズムの克服に向けての大きな課題である。

-
- * i F. W. J. Schelling, *Sämtliche Werke*, hrsg. v. K. F. A. Schelling, Stuttgart 1856-61
この全集からの引用については、引用箇所の上に（巻号、頁数）のみを付す。
 - * ii K.-H. Volkmann-Schluck, *Mythos und Logos*, Berlin 1969, S.6
 - * iii *ibid.*, S.7
 - * iv *ibid.*, S.50